

「樋口季一郎 ～誇りある救国の決断」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 「エリート将校」の様々な横顔

「日本人によるユダヤ人救出劇」と言えば、杉原千畝(すぎはらちうね)の「命のビザ」が有名ですね。ナチスの迫害からリトアニアに逃れてきたユダヤ人難民に対して、同国駐在の外交官だった杉原が大量のビザを発給し、約 6,000 人もの人命を救ったとされるエピソードは、近年特に有名になっています。

しかし、その杉原より 2 年も前に、彼と同じようにユダヤ人難民の危機を救った軍人がいたことを皆さんはご存知でしょうか。その名を樋口季一郎(ひぐちきいちろう)といいます。

樋口将軍は、人道主義の観点から批判を恐れずに多くのユダヤ人難民を救ったのみならず、絶望視されていたキスカ島の約 5,000 人もの将兵を生還させることに成功しました。

また、我が国が終戦を迎えた後も攻撃を続けたソ連軍を占守島(しゅむしゅとう)にて撃退し、ソ連が目論んでいた北海道占領の野望を打ち砕いたのです。

今回の講座では、誇りある決断を重ねた結果として、我が国存亡の危機を救った英雄たる樋口将軍の生涯をたどりながら、現代に生きる私たちが活かすべき教訓などについて探してみたいと思います。

樋口季一郎は明治 21 (1888) 年 8 月 20 日、兵庫県三原郡阿万村(みはまぐんあまむら、現在の南あわじ市)の奥濱家(おくはまけ)の長男として生を受けました。奥濱家は廻船問屋を営んでいましたが、後に家業が衰退したこともあって、季一郎が 11 歳の時に両親が離婚すると、母親のもとに引き取られました。

幼い頃から成績優秀だった季一郎は、明治 35 (1902) 年にエリート将校の早期養成のために創設された大阪陸軍地方幼年学校に入学し、優秀な成績で卒業すると、明治 38 (1905) 年には東京の陸軍中央幼年学校に入学し、明治 40 (1907) 年 5 月に卒業すると、東京の第一師団の歩兵第一連隊に配属の後に、同年 12 月には陸軍士官学校に入学しました。

明治 42 (1909) 年に第 21 期で陸軍士官学校を卒業した季一郎は、見習い士官としての歩兵第一連隊第二大隊での勤務を経て、少尉から中尉に昇進し、第一次世界大戦中の大正 4 (1915) 年に、後の陸軍大将の阿南惟幾(あなみこれちか)らとともに陸軍大学校に入学するなど、陸軍将校としての道を

着実に歩みました。

なお、陸軍中央幼年学校時代からの同期生には、後に陸軍中将(ちゅうじょう)となった石原莞爾(いしわらかんじ)がいました。また、季一郎は18歳の時に叔父にあたる樋口家の養子に迎えられ、樋口季一郎と名乗りました(当講座では季一郎のことを今後は「樋口」と表記します)。

さて、樋口は大正7(1918)年に第30期で陸軍大学校を卒業すると、翌大正8(1919)年には大尉に昇進し、参謀本部付になりました。同年に革命が起きていたロシアのウラジオストック特務機関員となり、情報将校としてインテリジェンスに携(たずさ)わった後、少佐への昇進を経て、大正14(1925)年からポーランド公使館付武官を務めました。

ポーランドに赴任(ふにん)した樋口は、ダンスを学んだり、オペラ鑑賞に足しげく通ったりすることで社交界の人気者となり、大いに人脈を広げました。

また、ソ連とドイツに挟まれていたことから、インテリジェンス活動に力を入れていたポーランド陸軍の暗号解読能力の高さを研究し、日本陸軍の暗号技術の格上げに大きく貢献しました。

我が国が後に大東亜戦争となった際、日本海軍の暗号が連合国にほぼ筒抜けとなっていたのに対して、日本陸軍の暗号が最後まで解読されなかっただけでなく、ソ連の軍事暗号を陸軍がかなり解読出来ていたのは、ポーランド時代の樋口の活動と決して無関係ではないでしょう。

昭和3(1928)年に帰国した樋口は、各地を勤務しながら中佐から大佐へと着実に昇進しましたが、昭和10(1935)年に、部下だった相沢三郎(あいざわさぶろう)陸軍中佐が、永田鉄山(ながたてつざん)軍務局長を殺害するという相沢事件が起きた際には、責任を取って進退伺(しんたいいかがい)を出したものの、慰留されるということもありました。

昭和12(1937)年8月、樋口は少将に昇進すると同時に、関東軍の情報部長ともいべきハルビン特務機関長となりましたが、当時はナチスによるユダヤ人への迫害が激しさを増していました。そんな折の同年12月、樋口は極東ユダヤ人協会の会長であった内科医のカウフマンの要望に応じて、第一回極東ユダヤ人大会をハルビンで開催させました。

当時の我が国はドイツと防共協定を結んでおり、ドイツの国策に反することになる大会を認めない方が良いのではないかという意見もありましたが、樋口は全く意に介さず、来賓として自ら大会にも出席しました。

大会当日、樋口は「一日本国民として出席する」という意思を示したのか、軍服ではなく平服で会場に現れると、ユダヤ人擁護の演説を行って、会場が万雷の拍手に包まれたと伝えられています。

これらの姿勢から見られるように、樋口自身は当時のユダヤ人が抱えていた苦難に対して同情的でした。そんな中、大会からわずか3ヵ月後に樋口は大きな決断を迫られることになるのです。

2. オトポール事件 ～人道主義に基づく決断

昭和 13 (1938) 年 3 月、ハルビン特務機関長として勤務していた樋口のもとに、驚くべき情報が舞い込んできました。ソ満国境(=ソ連と満州との国境のこと)に位置するオトポールという街に、多数のユダヤ人難民が現れたというのです。

ナチスから逃れようとドイツを脱出したユダヤ人難民は、まずポーランドを目指しましたが、ポーランド政府が受けいれに難色を示したので、彼らは次にソ連へと向かいました。

ソ連政府は、シベリア開拓のための労働力として彼らを利用しようと考えたために当初は難民の受けいれを認めましたが、後に彼らが役に立たないことを知ると、結局は難民の受けいれを拒否してしまいました。

次に彼らが目指したのは満州国でした。無蓋(むがい)列車に揺られて、遠路はるばるシベリア鉄道でオトポールまでやって来た難民らでしたが、ドイツと友好関係にある日本に気を遣(つか)った満州国外交部が、彼らの入国を拒否してしまったのです。

ユダヤ人難民の願いは、満州国から当時世界で唯一ユダヤ人難民をビザなしで受けいれている上海(シャンハイ)へ向かい、その後アメリカやオーストラリアなどの国々へ逃れることでした。

藁(わら)にも縊(すが)る思いでオトポールまでやって来たユダヤ人難民でしたが、満州国から足止めを食らって立ち往生してしまいました。

3 月の当地は最低気温が氷点下 20℃を下回るという厳しい寒さであり、難民たちは極寒(ごっかん)の原野にテントを張って助けを求め続けましたが、中には凍死する者まで現れ始めていました。

難民の困難な様子を耳にした樋口は、事態の深刻さを直ちに理解したものの、日本の一軍人が、友好を深めつつあったドイツの国策に反する決定を下すことは、容易ではありませんでした。

しかし、先述したカウフマンからも難民の救出を懇願された樋口は、熟慮を重ねた末に難民を受け入れることを決断したのです。なお、これら一連の流れを、今日では「オトポール事件」と呼んでいます。

「難民の存在を無視することはできない」。「人道上の問題」を重視した樋口の「誇りある決断」でした。

樋口はハルビン特務機関長という自らの地位を失うことを覚悟したうえで、満州国外交部にユダヤ人難民たちへのビザを発給するよう強く働きかけたほか、食糧や衣服の手配を各方面に次々と要請していきました。そのあまりに素早かつ確かな指示に対し、多くの部下が感嘆したそうです。

難民受けいれを決断した樋口でしたが、オトポールからハルビンまでの長い道のりを安全に護送す

るには、特別な列車を出す必要があったことから、樋口は南満州鉄道株式会社（＝満鉄）に掛け合い、最終的に運賃無料で輸送できることになりました。なお、当時の満鉄の総裁は、後に外務大臣を務めた松岡洋右（まつおかようすけ）です。

昭和 13（1938）年 3 月 12 日、ハルビン駅に難民たちを乗せた特別列車が到着すると、プラットフォームには多くの涙と笑みがこぼれました。難民たちには 5 日間のビザが発行されたほか、地元の商工クラブや学校へと収容され、そこで炊き出しを受けました。

樋口の決断によって、この後も多くのユダヤ人難民がいわゆる「ヒグチ・ルート」を利用してハルビンまでやって来ました。その総数はおよそ 2 万人とも、あるいは数百人から数千人とも伝えられています。

さて、樋口の「誇りある決断」によって、オトポール事件は一応の解決を見ましたが、彼の行動は当然のようにドイツ政府の怒りを招き、日本政府に対して公式の抗議書が届けられたほか、国内でも外務省や陸軍省を中心に樋口の独断を問題視する声が上がりました。

関東軍内においても樋口に対する処分を求める声が強まるなか、樋口は当時の関東軍司令官である植田謙吉（うえだけんきち）大将に、自らの所信を表明した文書を郵送しましたが、その内容は以下のとおりでした。

「小官（しょうかん、ここでは樋口のこと）は小官のとった行為を、けっして間違ったものでないと信じるものです。満州国は日本の属国でもないし、いわんやドイツの属国でもないはずである。法治国家として、当然とるべきことをしたにすぎない」。

「たとえドイツが日本の盟邦であり、ユダヤ民族抹殺がドイツの国策であっても、人道に反するドイツの処置に屈するわけにはいかない」。

樋口の書簡は軍司令部で再び物議を醸（かも）す結果となり、やがて新京（しんきょう、満州国の首都で現在の長春）の軍司令部に出頭した樋口は、当時の参謀長であり、後に内閣総理大臣を務めた東条英機（とうじょうひでき）に面会すると、以下のように言い放ったそうです。

「参謀長は、ヒットラーのお先棒を担（か）ついで弱い者いじめをすることが正しいと思われませんか？」

東条参謀長は、樋口の主張がもっともであると認め、軍司令部内での樋口に対する批判は下火となり、ドイツの抗議は不問に付されて事件は鎮静化しましたが、その背景には「ユダヤ人を排斥（はいせき）することは、我が国が長年国是としてきた人種平等の精神と合致しない」という一面もありました。

かくして、昭和 15（1940）年に約 6,000 人の「命のビザ」を発行し続けた杉原千畝より 2 年も前に、自己の地位をかけて「誇りある決断」を下し、結果として多くのユダヤ人難民を救った樋口の

名前が歴史に刻まれることになったのです。

なお、ユダヤのために貢献した人々を顕彰するゴールデン・ブックに樋口の名が記されていますが、ゴールデン・ブックの本来の役割は、「ユダヤ民族基金に対する献金記録簿」であり、先述した極東ユダヤ人協会が樋口に感謝を示す意味で、後日に彼の名前で献金を施(ほどこ)したということです。

ところで、先述したように、難民を運賃無料で輸送することを決断した満鉄の総裁は、後に外務大臣となった際に、杉原千畝からのユダヤ人難民へのビザ発給の申し出を拒否した松岡洋右でした。なぜ松岡は樋口の申し出を受けた一方で、杉原の願いは拒否したのでしょうか。

松岡は「反ユダヤ主義を支持するつもりはない」と常々主張していましたが、外務大臣に就任した当時は、我が国とドイツとが同盟締結の交渉中であったことから、難民の受けいれを拒否したとされています。

ちなみに松岡は、杉原に受けいれ拒否の電報を送る際に、周囲に内容が漏れないようにする暗号電報ではなく、敢えて普通電報を使用しています。この姿勢にこそ、反ユダヤ主義を不支持としながらもドイツとの同盟を優先しなければならなかった、松岡の苦衷(くちゅう)がうかがえるのではないのでしょうか。

また、樋口が主張した「ユダヤ人難民の受けいれの正当性」を認めた関東軍参謀長(当時)の東条英機(とうじょう)の存在も大きかったと思いますが、もし、オトポール事件における樋口の決断を東条が支持したことが、当時の世界に知れ渡っていれば、東条自身のその後の運命も変わったかもしれません。

3. キスカ撤退作戦 ～苦渋の決断が導いた「パーフェクト・ゲーム」

さて、オトポール事件後の樋口は更迭(こうてつ)されることもなく、昭和14(1939)年には中将に昇進しましたが、まもなく時代は大東亜戦争を迎えることとなりました。

昭和17(1942)年6月、日本軍はハワイ攻略の足掛かりとして北部太平洋アリューシャン列島の西端に位置するアッツ島とキスカ島を占領しましたが、最大の目的であったミッドウェー海戦に敗北したこともあって、相対的な戦況は徐々に悪化していきました。

翌7月に北部軍(後に北方軍と改称)司令官として札幌に赴任した樋口は、昭和18(1943)年4月に「アッツ島に事(こと)有らば万策を尽くして増援する」と約束して、山崎保代(やまさきやすよ)大佐を新たな守備隊長として送り出しましたが、その直後の翌5月に、アメリカ軍がアッツ島へと押し寄せてきました。

緊急事態となったアッツ島に対して、樋口は武器弾薬や食糧資材などを輸送する準備を進め、増援部隊を送るために懸命の努力を重ねました。

しかし、そんな樋口に対して、大本営は5月20日に「アッツ島への増援を都合により放棄する」

と通告してきたのです。

戦局が悪化しつつあった当時は、南太平洋方面の消耗(しょうもう)があまりにも激しく、アリューシャン列島にまで海軍が艦隊や航空兵力を割(さ)くことが不可能な状態でした。それゆえの大本営の通告であり、樋口も頭の中で理解できなかつたわけではありません。

しかし、前線で死力を尽くして戦っている山崎守備隊長以下に「増援部隊を送る」との約束を果たせなくなったという非情な現実に対して、深い懊悩(おうのう、悩みもだえること)と慙愧(ざんき、自分の見苦しさや過ちを反省して心に深く恥(は)じること)の念を抱いた樋口は、自己の無力さを嘆きつつも、大本営の命令を涙ながらに受け入れる以外に手段がありませんでした。

翌 21 日、樋口は断腸の思いで、アッツ島に向けて増援が出来ない旨の以下の電信を送りました。

「中央統帥部の決定にて、本官(=樋口)の切望救援作戦は、現下(げんか)の情勢では実行不可能なりとの結論に達せり。本官の力及ばざること甚(はなは)だ遺憾(いかん)にたえず、深く謝意を表すものなり」。

これに対し、翌 22 日に山崎大佐からの返電が北方軍司令官に届きました。

「戦(いく)さする身、生死はもとより問題にあらず。守地よりの撤退、将兵の望むところにあらず。戦局全般のため、重要拠点たるこの島を、力及ばずして敵手(てきしゅ)に委ねるに至るとすれば、罪は万死に値(あた)いすべし」。

「今後、戦闘方針を持久より決戦に転換し、なし得る限りの損害を敵に与え、九牛(きゅうぎゅう)の一毛(いちもう)ながら、戦争遂行に寄与せんとす。なお爾後(じご、以後と同じ意味)、報告は、戦況より敵の戦法、及びこれが対策に重点をおく」。

「もし将来、この種の戦闘の教訓として、いささかでもお役に立てば、望外の幸(さち)である。その期至らば、将兵全員一丸となって死地につき、靈魂は永く祖国を守ることを信ず」。

アッツ島の守備隊は圧倒的な兵力を誇るアメリカ軍相手に健闘を重ねたものの、5月 29 日までに山崎守備隊長以下ほぼすべての将兵が壮絶な戦死を遂げ、我が国初の玉砕戦となってしまいました。

なお、アッツ島での玉砕直後に悲報を耳にされた昭和天皇は、「最後までよく戦った」という惜別の電報を、二度と聞くことのできない部隊に対して発するように命じられたと伝えられています。

アッツ島玉砕の悲劇に対して、司令官たる樋口の抱えた苦しみはあまりにも大きく、食も喉(のど)を通らなかつた彼の体重は 20 キロ近くも減り、頬はこけ、眼は悲しみに潤みましたが、その一方で樋口はアッツ島放棄という「苦渋の決断」と引き換えに、別の条件を大本営に突き付けていました。

樋口が迫ったのは、アッツ島のそばのキスカ島に残っていた将兵を撤退させることでした。「アッツ島の二の舞は踏ませない」。樋口の必死の思いはやがて実り、潜水艦を使って将兵を少しずつ撤退させ始めました。

しかし、アッツ島の玉砕もあって、アメリカ軍に制空権も制海権も奪われた状態では、5,000人以上にのぼる将兵すべてを無事に撤退させることは容易ではありません。そこで、速度の早い軽巡洋艦(けいじゅんようかん)や駆逐艦(くちくかん)を投入して一気にキスカ島に突入し、残りの将兵すべてを一挙に撤収させる作戦が考案されました。

撤退作戦は現地特有の濃霧も味方して、各種兵器こそ遺棄(いき)せざるを得なかったものの、7月29日には全員が乗船し、無事撤退することに成功しました。

日本軍が撤退した直後から、アメリカ軍が無人となったキスカ島への攻撃を開始しましたが、濃霧の中で日本兵が待ち構えているという思い込みから激しい同士討ちが起きてしまい、死者まで出してしまう有様となりました。

散々な目にあったアメリカ軍は、我が国の撤退作戦を「パーフェクト・ゲーム」と呼びましたが、世界史上でも珍しい完全な撤退を成功させた背景には、現地における海軍の指揮官の好判断とともに、将兵を一人残らず生還させるという樋口の強い意志がありました。

作戦成功の要因として、樋口は現地の濃霧や将兵を命がけで救った海軍の友軍愛、そしてアッツ島に散った英霊の加護を挙げると共に、後年にはこのように語っています。

「アッツ部隊があまりに見事な散華(さんげ)全滅を遂げたので、アメリカ軍はキスカ部隊も必ずやアッツと同じ戦術をとるものと考え、撤収など考慮しなかったのではないか。この意味において日本軍の意図を秘せしめたるは、アッツ島の英霊といえるのである」。

キスカ島の将兵全員の生還は、アッツ島の将兵を犠牲にせざるを得なかったとしても、キスカ島の将兵は必ず守るという、樋口の「誇りある決断」がもたらした奇跡でもあったのです。

4. 占守島の戦い ～ソ連の野望を打ち砕いた決断

昭和19(1944)年から20(1945)年に入って戦局がますます悪化すると、樋口は北方軍を改編した第5方面軍司令官に北部軍管区司令官を兼任するかたちとなりましたが、同年8月6日に広島に原爆が落とされると、その直後の9日には、我が国と中立条約を結んでいたソ連が一方向的に条約を破棄して、満州北部などへの侵攻を開始しました。

我が国がポツダム宣言を受け入れ、終戦となった8月15日を過ぎてもソ連の攻撃は止まることなく、18日には千島列島の北東端に位置していた占守島(しゅむしゅとう)に攻め込み始めました。

戦争の継続を断念した我が国の固有の領土への上陸作戦を展開した、ソ連の意図が侵略にあると見

抜いた樋口は、現地の将兵に対して「断乎(だんこ)反撃に転じ、上陸軍を粉碎せよ」と飛電(ひでん、至急の電報を打つこと)した一方で、大本營の命令で 18 日午後 4 時をもって各方面におけるすべての戦闘行動を一切停止しなければならないことも承知していました。

樋口は大本營に対してソ連との停戦交渉を願い出ましたが思うに任せず、やがて 18 日の午後 4 時を過ぎてしまいましたが、目の前でソ連の卑劣な侵略行為が続いている以上は、19 日以降も散発的な戦闘が続くのはやむを得ないことでした。

占守島の戦いにおけるソ連軍の攻撃は激烈を極めました。日本軍は民間人を含む多くの犠牲者を出しながらも果敢に抵抗し、敵軍の侵攻を最前線で食い止めました。

やがてソ連軍は 22 日になって停戦交渉に応じましたが、その背景には、アメリカ軍による北海道への進駐があったほか、アメリカのトルーマン大統領がソ連のスターリンに対して「北海道占領を認めない」という書簡を出していたことも影響していました。

しかし、たとえアメリカの強い意志表示があったとしても、ソ連が自力で勝手に北海道を占領するなどの既成事実をつくってしまえば、それを覆(くつがえ)すことは難しかったでしょう。各地の将兵の決死の戦闘と、それを支えた樋口の「誇りある決断」が我が国の危機を救ったともいえます。

ただし、ソ連の理不尽さはこの後も止まることを知らず、占守島上陸作戦の後にも南樺太を占領したほか、択捉島(えとろふとう)や国後島(くなしりとう)なども不法に支配し、我が国固有の領土である北方領土は、いまだにロシアから返還されていません。

加えて、占守島などで戦った将兵たちが武装解除後にシベリアへと抑留され、劣悪な環境で重労働を強(し)いられたのみならず、多くの人々が亡くなるという悲劇があったことを、私たちは決して忘れてはならないでしょう。

終戦後、北海道の小樽(おたる)郊外でひっそりと暮らしていた樋口を、ソ連が戦犯とみなして召喚(しょうかん)しよう GHQ (= 連合軍最高司令官総司令部) に対して申し入れました。

確かに、ハルビン特務機関長や第 5 方面軍司令官などを務めた樋口の軍歴は、ソ連にとっては「敵の大物」であるといえましたし、何よりも北海道占領の野望を打ち砕いた張本人でしたから、ソ連が樋口を戦犯の対象とみなすのはむしろ当然でもありました。

しかし、そんな樋口の危機に立ち上がったのがユダヤ人でした。かつてオトポール事件で樋口によって多くの人命を救われたユダヤ人たちの間で救出運動がおこると、ニューヨークに総本部を置く世界ユダヤ教会が、ソ連からの要求を拒否するようにアメリカの国防総省に強く訴えたのです。

これらの動きが奏功(そうこう)し、GHQ のマッカーサーはソ連の戦犯引き渡し要求を拒否しました。まさに「情けは人のためならず」。多くの名もなきユダヤ人に生命を助けられた樋口は、その後も各地を転居しながら静かな日々を過ごし、昭和 45 (1970) 年 10 月 11 日に自宅で満 82 歳の天寿を

全うしました。

5. 「誇りある決断」がもたらしたもの

樋口将軍はその生涯において何度も大きな局面に遭遇しましたが、彼の「誇りある決断」がもたらした史実は、我が国を救った「奇跡」として歴史に燦然(さんぜん)と輝いています。

しかしながら、彼の功績が後世の人々に語り継がれる機会はこれまでにほとんどなく、特にユダヤ人難民の救出に関しては、杉原千畝よりも2年も前に実現していながら、その存在が忘れ去られようとしています。

時系列的に見ても、樋口の人道的な決断が、杉原による「命のビザ」の下地(したじ)となったことが十分に考えられながら、なぜこのようなことになっているのでしょうか。

その背景には、外交官であった杉原に対して、樋口が「現役の陸軍軍人」であったことが関係していると思われます。

大東亜戦争後にいわゆる「平和憲法」を押し付けられるかたちとなった我が国では、異常なまでの「軍事アレルギー」がもたらした「陸軍悪玉論」が常識となる傾向にありました。

戦後70年以上が経った昨今になって、ようやく単細胞で脊髓反射的な「悪玉史観」だけで歴史を語る愚かさに、多くの日本人が気づきはじめ、これまで闇雲に蓋(ふた)をされてきた歴史の真実を見直そうという動きが、あちらこちらで起きてるように見受けられます。

樋口将軍による「誇りある決断」が結果として救国につながったという事実についても、必要以上に美化することもなく、冷静かつ健全な評価を行うことが今こそ可能ではないでしょうか。

「オトポール事件」や「キスカ撤退作戦」、そして「占守島の戦い」が「日本人として知っておくべき史実」であることは疑いないのであり、先人の歴史や智慧(ちえ)に学ぶ姿勢こそが、混迷続く世界情勢で我が国が生き抜くための指針ともなるのです。(完)

主要参考文献：「指揮官の決断」(著者：早坂隆 出版：文藝春秋)
「北海道を守った占守島の戦い」(著者：上原卓 出版：祥伝社)
「歴史街道 2012年4月号」(出版：PHP研究所)

YouTube 再生リスト「樋口季一郎」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML73mo81hd49h1jRHmmPnygY>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>